



TITLE:

倫理学研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

田中, 熙

CITATION:

田中, 熙. 倫理学研究. 京都大学, 1964, 文学博士

ISSUE DATE:

1964-06-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211275>

RIGHT:

【 6 】

氏 名	田 中 熙 た なか ひろし
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 7 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	倫 理 学 研 究

論文調査委員 (主 査)
教 授 島 芳 夫 教 授 高 田 三 郎 教 授 野 田 又 夫

論 文 内 容 の 要 旨

主論文「倫理学研究」の内容は我汝の主体的呼応関係を基礎にして道德現象を解明することにある。論文は前篇・原論と後篇・各論に分れ、前篇は「倫理の現実と現実的倫理学」、「実質的価値倫理学の概念」、「倫理感情の現象学的本質分析」、「政治論及び政策論と世界観学」、「現実存在と我汝の双歎」、「社会倫理学と実存主義の立場」の六篇より成り、後篇は「倫理学の性格」、「家族道德に関する問題」、「社会道德に関する諸問題」、「国家道德に関する諸問題」の四篇より成る。前篇においては先ず著者は、従来の倫理学的反省の方法には主体の人間を客観的事物として考察する擬物観とも言うべきものが存在し、デカルトの物心二元論はその著明な一例である、それは一方では認識主観を純粹に観るだけの眼とし、無時間化、先験的形式化、無世界化することによって人間固有の主体性を見失い、これを客観化するという、道德の存在する場は主体とその関係にあるから、かかる擬物観の方法では理解され得ないこと、かくして倫理の現実の実存主義の立場から考察さるべきことを主張する。次に著者はマックス・シェーラーの実質的価値倫理学と彼の倫理的感情の現象学的分析及びその政治・社会評論の綿密な研究を通して自己の立場を明らかにする。著者によれば、フッセルは現象学的方法を数理的論証の厳密さをもって基礎づけたが、シェーラーはこれを豊かな哲学的人間学の方角へ具象化した。彼の本質分析は未だ静態的非歴史的なところがあるが、然しその人格主義や道德感情の分析は倫理的主体の存在の解明に大きな貢献をしている。彼の人格は価値と作用の綜合統一者であり、自律的個体であるとともに総体人格の成員でもあり、愛の作用の主体であるとともに愛の作用によって始めて開示される存在でもあるが、このような人格概念は主体性の反省に重要な役割を演じているとする。特に著者は後期の文化社会学や哲学的人間学が、人格又は精神を、衝動的実在因子を抑制・解放・指導する機能を有するものとし、理念因子と実在因子との協働・牽制関係において上部・下部構造論を修正し、精神主義と自然主義、観念論と実在論の調停を試みていることを力説する。次いで著者は本論の中心を成す我と汝の人間関係論を論述する。先ず倫理的現実性とは何かが問題になるが、著者はこれを我と汝が相互に双歎・呼応する人間関係にあるとし、かかる人間関係を強調す

る思想は西欧においてフォイエルバッハを始め、フッセル、シェーラー、ハイデッガー、ヤスパース等の現象学者、実存主義者の中に見出され、更に、ブーバー、ゴーガルテン、ハイム等の神学者によって発展されたとする。著者の言う「現実」又は「現実存在」は単なる自然的態度によって素朴に独断されている事実、或は科学によって抽象的客観的に構成される対象とは異なり、主体即客体的、内即外的、動即靜的に生成躍動する存在である。現実存在は著者によれば、自覚存在以上のもので、寧ろ前意識的生命の一体感に深く根差している。特に重要なのは、それは家族、祖国、教会等の種々なる人間関係の場に現れる我汝の関係として現存するということである。それは矛盾論理でなくて和解論理の立場、「講壇概念」としての哲学でなくて「世界概念」としての哲学の立場に立ち、孤我自覚、解釈学的認識主観の理解を遙かに越えている。著者は更にこの自己の見解の下に近代・現代の代表的哲学を論評して言う：確かにデカルト、カント、フィヒテの観念論的自我哲学は驚くべき仕方で近世の人間存在を開示した。然しそれは今日では、我々には単に冷かな応答として存在するに過ぎない。又近世レアリスムスー唯物論・自然主義・科学の実証主義も一面的偏見抽象にとどまっている。更に又絶対観念論も我汝の呼応に迫ることは出来なかった。現実存在は単なる我、単なる汝、単なる一個人だけで現成するのではなく、個体的種の普遍的存在相互間の同時呼応、授受逢会を通して現成する。これに対して観念論的自我哲学の側から、かかる我汝の呼応もその規定においては思惟によってなされる以上、依然として「我思う」の範疇においてなされるという異論が呈されるであろう。然し自我哲学の「我思う」に対して近世市民階級の第二の「我思う」がより根源的であり、これはこの階級全体の我汝呼応の形において遂行されたのである。かくして思惟的孤立私の追求にひたむきな人々、他国家への理由なき圧迫侵略に狂奔する政治家、私利の追求に寧日なき経済人に比べるならば、却って親子兄弟団欒し、隣人に奉仕しつつ勤労にいそむ人々の方が遙かに実存的であると結論する。次に著者は社会環境の科学的客観的研究と主体の哲学的倫理的研究との関係を論じ、両者は方法論的相違を通して並存相補の関係にあると言う。特に社会哲学の面において自他相関の範疇を重視し、今日の社会における人間事物化の大勢に抵抗する手懸りをそこに見出そうとする。

後篇では著者は先ず道德生活の多様性と一様性の並存関係を明らかにし、次いで社会科学と倫理学との相補関係を再び取上げ、社会科学は倫理学に対して中間的手段的位置をもつとともに倫理学はその目標と理想を示す関係にあると見る。次に著者はこの考え方を具体的に展開するために、豊かな社会科学研究成果を生かしながら、社会生活の各領域にわたって見出される主体的人間関係と客観的環境の諸条件との相互関係を考察する。先ず家族・遊戯・学校の諸集団の特質を究め、労働・職業の倫理を論じ、次いで機械技術文明と倫理の関係と言う重要な現代的倫理問題に対して、樂觀・悲觀の何れにも偏しない公平冷静な第三の批判的評価の立場の可能性を明らかにし、更に国家の本質、法と道德、政治と倫理の関係を述べ、最後に人類に対する国家の使命の倫理的内容を論じている。

なお参考論文は「倫理学における社会性と実存性」、「我が国の家庭における道德教育について」、「倫理現象と政治現象」、「言語と倫理」、「価値倫理学と実存倫理学序説」、「倫理学教材1—2」、「倫理学」、「教養倫理学」の八篇より成り、それぞれ我汝の関係と社会倫理との相互関係を或は方法論上から、或は具体的問題の研究を通して解明している。

論文審査の結果の要旨

倫理学が道德の人間関係の性格から見て、この関係の研究を最も重要な課題とすることは自明のことである。ただこの自明のことが必ずしも常に倫理の根本問題として自覚されていなかった点に反省すべきものがある。著者はこの点を捉え、近代哲学に特徴的な孤立的自我の独断を批判すると同時に、我汝の呼応関係が単に倫理的主体だけでなく人間主体の存在論的規定であると主張する。この我汝関係の存在論的究明は主として神学者や実存主義者によって行なわれたが、この西欧の思想系譜を広く究明、理解するとともに、これを独自の仕方で発展させ、倫理学をこの視点から再検討するところに本論の新しい意味がある。著者はこの際、近代から現代に至る代表的哲学に対して適切な観察と批判とを与えているが、特にシェーラーの倫理学と社会哲学の綿密な研究は少からぬ意義を有する。著者はこの研究において、一部の哲学者によって理性主義的に歪められた実存の概念を生と情緒との関連において捉え、人格を精神と生の綜合統一として理解すべきことを指摘すると同時に、アウグスチヌスの愛の思想に生きるシェーラーの人格的愛の中に主体の本来の有り方を見出しているがこれは人格主義の妥当な解釈である。然し著者は人間の主体的内面的関係を力説すると同時に、デュルケーム風の実証社会学にも強い関心を示し、倫理学と社会学の相補関係を方法論と具体的研究の両面において明らかにしたことは倫理学に新しい道を開いたものと言ってよい。ただ著者の強調する二元的主体関係としての我汝の関係は双歎、責任応答としての規定以上に分析解明を要すると思われ、又社会倫理学的研究においてもその広範囲のために論述が皮相に了っている部分もある。例えば、政治の本質規定や国家目的の倫理的規定にこの不十分さが認められる。然し全体として見れば、本論は著者の独自の倫理感と豊かな学識に裏付けられた幅の広い研究成果を示すものとして高く評価すべきである。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。